三池主婦会

※原稿送り先＝大牟田市不知火町2丁目　三池炭鑛主婦会
※電話で知らせるとき＝市内3033・7140　炭鑛　474・528
※責任者＝文教部長　川畑信子

安保不承認と国会解散
こんどのたたかいの為に

新安保阻止闘争を通じて示された国民の巨大なエネルギーは、いま新安保条約不承認、国会解散、安保体制の打破、一切の弾圧排除、民主主義擁護、そして新安保条約廃棄を終局の目的としてさらに大きくもりあがろうとしています。おそるべき破滅をみちびき出す戦争への危険性をはらみ、その内容も日米軍事同盟の性格を一段とつよめた新安保条約の抜打的な批准後、岸内閣はまるで〝虎の威〟をかりたようにあいついでファッショ的な言動を示しはじめました。「安保闘争を指導した組合幹部は断固処分する。今国会でデモ禁止法やスト規正法を通過させ、労組法や労調法も改正する」という松野労相の発表がそれです。

第二の岸

新安保条約の締結が〝安保体制〟の強化をもたらすものであるということがはじめから明確であつただけに、この暴挙につづく暴挙をわたくしたちは今後一日も長く許すことはできません。岸内閣はいま国民の手によつて〝野たれ死〟の寸前にありますが、岸のあとにはまた第二の〝岸〟が岸すわろうとして陰謀をつづけています。第三、第四の〝戦争屋〟があとにひかえていることもわたくしたちは忘れてはならないでしょう。このような中で、今後に予想されることは、岸内閣と自民党主流派の企図する新内閣は、

▽アイク訪日中止で失墜した保守党の対米信用回復のため、新安保の忠実な実行を約束し、同時に貿易為替の自由化を推進して対米追従の姿勢をとるであろうこと。

▽アメリカの不信を買つた治安対策強化のためデモ禁止、労働者、学生の政治活動の制限、反動文教政策、警察力の強化など大衆の政治行動に抑圧を加えてくること。

▽若干の産業保護、社会保障などのギマン政策を準備し体制を整備して総選挙を行なおうとするということです。

私たちは去る五月十九日に、衆議院の会期を一週間残していたのに五百人の警官を導入して、野党議員をしりぞけ本会議の開会を宣言して会期を延長し、そのあと与党の反対議員退席という混乱のなかで新安保承認を一気に議決してしまつたことをおもいおこします。

そして六月二十日には抜打ちに参院本会議を開いて、与党議員だけで安保に伴う三十二件の国内整理法を成立させてしまつたこと。このような議会運営を私たちが承認するなら、独裁への道を開き悔を千載にのこすことになるでしょう。

総選挙を勝取こう

新条約はまだ承認されていません主権在民、軍備と戦争放棄、民主主義を期する日本憲法は太平洋戦争のギセイのうえにえられたものです。私たちは憲法を守る立場から政府、与党単独の衆・参両院の議決に反対し、新安保と関係国内新条約の危険性と国会の非民主的な運営の詳細を多くの人びとにしさらに安保の学習のなかで知つた法の不承認運動を全国でひろげていくこと。

福岡地裁正門前に主婦も坐込みを続けた

勇気づけた活け花

きようも会社のニュースカードが、がなりちらして帰りました会社の宣伝内容と反比例して会社のあせりを現わしています。このあせりを現わさざるを得なくなつた理由はいろいろあるでしょう。第一に、全国の仲間はいうにおよばず、言葉を通じない世界の労働者の三池支援の姿など。

しかし私はこう思います。第二組合が出来ても、どんなことがあろうと「どんとこい」という三鉱労組員の一人ひとりの、勝利の確信にみちたもえる眼の色が、会社にたちたちと手をあげさせかけていると思います。その確信の眼の色の奥には、家族一丸となつた姿があります。

私が外来の激励にまわつたおり、年とつたおいちゃん、ばあちゃんが一生懸命に頑張つて、家の留守はひきうけたといつた姿に心をうたれ、もう私たちに勝利の旗は上がつたとますます確信を深めたものでした。

このような姿が地域と主婦会で二十名ばかりいて、殺気だつていたおりもありました。そんなおりでも闘争本部に行き、その活けられた花をみて、激流のことを思い出し、自分たちの闘いは第二組合との闘争ではないと、心のゆとりができ、大きい広々とした心になつたものです。

この近藤さんは、二十八年にも主婦会員として一生懸命先頭で頑張つた方だそうです。この方の心の奥には、自分の子の代でできなくても、孫の代には社会主義社会にしたいものだという熱意があるものだと思います。

私たちは家の内では、このようなおおいちゃん、おばあちゃんにはげまされ、外では全世界の労働者のスクラムの中で闘つています。最後の勝利の日まで会員一人ひとりが仲よく手をとりあつて闘いぬきましよう。

旨きり族のいきの根をとめる日まで!!

（七夕分会　松尾スエノ）

暖い支援の手
＝オルグから帰つて＝

川畑信子

五月三十日逆オルグとして、東京・神奈川へ出発した。三十一日東京着、さつそく社青同、民主青年主催の「三池を守る会」に出席した。七百名の青年・婦人の集まりは、三池支援のすごいもりあがりで有意義な大会であつた。

翌日より、東京・神奈川を昼夜三カ所、おもに組合家族会へ妻として、母としての、女の立場からオルグ活動を行つた。一日より五日間東京地評、六日より十一日まで神奈川地評の指示により行動をとる。地評では、各単産からの申込みが多く、うれしいヒメイをあげていた。私たちも一人でも多くの人に理解・支援していただくために、体の許すかぎり消化につとめた。

はじめて三池主婦会を受け入れ三池の実態や主婦会の活動を、心ゆくまで聞かせてほしいとの声を聞かされた。家族会結成いらい初めての集いだということを、あらゆる場所で耳にした。三池の外来分会のように散ざいした所ばかりである。

三池争議の実態を、まの当りに聞かされるのだということで、初めてのこころみである集会が、八五%の好成績で開かれた。いろいろ話合うなかで、関しんをもたれたのは、何といつても一万円生活都会では想像できかねるようであつたが、いろいろ質問に答え話合ううちに、深くうなづいて聞いて下さる。なかには「三池さん、最後まで頑張つて!!」と声援が送られた。母親としての共通の話題である、子供の質問も多く出た。子供のない私には、残念であつたがまの当りに見る子供の行動を知つている限りを答えた。婦人会による三池労組主婦会への悪宣伝等の質問が湧く。

三池の問題を中心に集会がひらかれ、質問される中では、皆さんが現地の本当のことをありのままを知りたがつているのだということを深く知らされた。会合では、カンパ案が提出され、帰山するときには三万円以上の暖かい、心のこもつたカンパが集まつていた。

六月十一日、安保統一行動には「三池労組主婦代表」のタスキをかけ、横浜より東京都内を二十万の全国の仲間とデモつた。いたるところで「三池頑張れ」の声援、あく手を求める方、物質のカンパをたくされる方など、せいぜんと続いたデモの中でも、三池支援は力強いものがあつた。

「三池は孤立していない」ということをたびたび聞かされたが、確かに孤立していないことを実感としてうけとつて来た。

街から村から、辺地にいたるまで三池の実情を訴えるならば、縦横の力強い三池支援の態勢が、「守る会」が、もつともつと発展して行くことだろうと深く感つた。

関連産業との交流座談会

関連商業と三池労組の組合員・主婦の交流座談会が七月五日から十六日までひらかれることになつた。これは、組合幹部だけの交流ではなく、下部の組合員・主婦会員に直接三池労組の社宅に入つてもらい、座談会を交流することによつて、闘争の理解を深めようというものである。

主婦の激励・来山

6月30日＝岡山県評から主婦代表十二名が来山した。また同日には別子鉱山（愛媛県）の主婦会から、三池闘争を拡大するため三池主婦会に代表招へいを申入れてきたので、二名を派遣した。

7月2日＝熊本県評婦人部六十名がバス一台で激励のため来山した。

【トピック】

北京で「三池の闘い」等

北京からの便りによると、北京テレビ局では〝ニュースの夕べ〟を中山公園で開き、六・四スト、二十万人の大デモ、三池の闘い、ハガチー・デモを上映して、日本人民の闘いを紹介したが、観客から拍手の連続だつたという。

6・15の真相を聞く集い

安保批判の会・日本自由人権会で

安保批判の会と日本人権協会は六月二十五日午後一時から東京九段会館ホールで約三千名の都民を集めて六・一五の真相を聞く集いを開いた。

この集会で六・一五の右翼暴力団や警官の暴力を目撃し、また、そのために傷つけられた新劇人や、大学教授がそのときの真相を報告した。

報告者は安保批判の会の大塚欣蔵氏、ぶどうの会の山本安英氏、東芸の上甲田みより氏、民主主義を守る学者研究者の会の北川隆吉氏東大教授の福武重行氏らであつた真相報告の後、生ま生ましいラジオ関東の実況放送の録音再公開があり、民主主義を守る音楽家の会安保阻止新劇人会議による感動的なシュプレヒコールが行われた。ひきつづいて中野好夫氏が「民主主義と六・一五」、横俊雄氏が「娘を奪われて」のテーマで講演し、六・一五を記録した、読売ニュース、毎日世界ニュースを上映し、吉野源三郎氏の「今ほど言論の自由が痛感されることはない、真に言論の自由があれば、労働者のストライキという苦しい闘争も、学生の激しい闘争もなくてすんだのです」という閉会の辞をもつて終つた。

十五日以後、私の会つた新聞報道関係で十五日夜現場にいた若い人が、口を揃えて言うことには、十五日夜の真実と翌朝の新聞報道があまりにもちがつているということでした。十五日の事件をほとんどの新聞が書いていますが、あの日の真相を伝えた新聞が一つとしてあつたでしようか。

報道機関も忠実に伝えてくれないとすれば、原始的なことであつてもその真相を知つている人々が本当のことを伝えていくほかに道はないと思います。

十五日をきつかけに一応アイク訪日の中止、岸首相の退陣声明があつたのですが、これが決して問題の解決ではない。そのあとにはこれだけ多くの国民が、これだけの疑問と不安をもつている。史上かつてなかつたほどの抵抗運動を国民がしたにもかかわらず、五・一九の自然承認にまでもつていつた後、抜き打ち議決、肩すかし批准手続がなされた。これが岸内閣の国民にのこしたお土産です。

下品な言葉ですが泥棒の野郎というものがあります。岸は国民というどこに野郎をたれたのであり、そして、国民からどんなに嫌われてもまことに厚顔無恥といおうかシャアシャアとして脱税し、汚物を残して行つたのです。そしてこれを処置する仕事が、私たちに残つている。いかにして岸の残したこの汚物の処理を私たちはしなくてはならないか。その闘いは相当長くなるでしよう。これまでの怒りのエネルギーは保持しながら、しかしそのあらわし方は、われわれがよく考えねばならないのではないか。

私個人として考えていることを二、三申し上げたい。

第一に、自然成立はしたが、昨年来の安保闘争はかつてない高まりを見せました。しかし、冷静に考えれば、運動がもり上つてくれば全体が一つになつていかねばならないのに、その安保闘争は、分裂を重ねていることであります。社会党が民社党と分裂したが、民主主義擁護のときは一しよに闘つた全労と総評がなぜ一しよにやれないのか。学生運動もまた分裂した。これが事実なのです。

もちろん、一枚岩のような統一行動は考えられないが、仲間同志のケンカの方が、敵に対してよりは大きいようです。

このことは、こんどこの怒りを保存し高めていくためにも反省しなければならないことです。

第二に五・一九以来、このような催しが昭和満員でなかつたことはない。これもかつてないもり上りを考えられますが、しかし、全国民から考えると多数だ、多数だと楽観するわけにはいかない。日本国民の中には無関心な方も多い。

このエネルギーをこれからの闘いにもつていくには、恐らくイソップにある北風と太陽のようなやり方でなく、太陽の方に吸収していかねばこれからの汚物の処理はできないのです。

第三に私たちは自然成立すれば国民の運動はガタンとくるのではないかと考えましたが、そのようなことはないようです。私たちは無関心な人々の方に伝えることに努力をおくべきです。ちようど新中国が何片戦争のときから百年間かかつて民衆の中へどのように抵抗の根を下していつたか学ばなければならない。私たちは今の感動と印象を何らかの形にあわす努力をしたい。

（中野好夫氏は評論家）

この怒りのエネルギーをどこえ持つていくか

中野好夫